



学校便り 琢磨

第39号 R3.1.14 三豊市立詫間小学校

プチリフォーム！

新HP <https://mitoyo.schoolweb.ne.jp/mitoyo/takuma-e/>

冬休み中に、うさぎ小屋のプチリフォームをしました。色あせたうさぎとニワトリのシルエットの板を取り外して、新しくうさぎの絵を描いて取り付けました。自分で言うのも何ですが、「なかなか可愛いうさぎさんができた！」と満足しています。こういうのを自己満足（じこまんぞく）と言います。自画自賛（じがじさん）とも言います。

実は、このうさぎ小屋。もう1か所、リフォームした所があります。さて、それはどこでしょうか？するどい詫間小のみなさんなら、もう分かったという人もたくさんいることでしょう。ヒント：家の形



3学期の学級委員任命式がありました！

1月13日（水）。今回も、私が各学級を回って、3学期の学級委員の任命式を行いました。今年度、最後の学期のリーダーに選ばれた36名のみなさん。よろしくお願いいたします。

6松	池田 悠聖 さん	田尾 希彩 さん
6竹	森 優翔 さん	大開 桜子 さん
6梅	中林龍之輔 さん	眞鍋 小波 さん
5松	名越 祐吏 さん	大坪 愛依 さん
5竹	林 大喜 さん	前川 藍花 さん
5梅	塩田 拓陽 さん	山地 愛子 さん
4松	則久 海舟 さん	田尾 苺紅 さん
4竹	尾崎 蓮斗 さん	松田 歩実 さん
4梅	松田 佳亮 さん	草水 妃奈 さん
3松	犬伏 玲煌 さん	西原 詩 さん
3竹	門田 陽登 さん	石井 杏珠 さん
3梅	小林 蓮 さん	橋本 怜 さん
2松	吉武 裕真 さん	則久 愛蘭 さん
2竹	續木 史也 さん	吉久 遥香 さん
2梅	藤田 逸希 さん	大平 莉埜 さん
1松	汐見 遥馬 さん	荒井 渚 さん
1竹	津々池直大 さん	林本 依叶 さん
1梅	大開 拓海 さん	板倉 芽生 さん



石油ストーブの思い出

小学生のみなさんは、「石油ストーブ？何それ？」と思う人もいるかもしれませんね。石油ストーブとは、灯油を燃やして部屋をあたためる物です。「何だ。ファンヒーターか！」と思った人。だいたい合っています。灯油を燃やして部屋をあたためるということは同じです。しかし、ファンヒーターは、電気でファンが回り、灯油が燃えた熱であたたまった空気を送り出しますが、石油ストーブは風が出ません。単に燃えているだけです。「ますます分からない！」というみなさん。お家の方に聞いてください。保護者の皆様、もうしわけありませんが、子どもたちに説明してあげてください。

とにかく、私が子どもの頃は、この石油ストーブも高級品で、我が家には石油ストーブが1台しかありませんでした。もちろんエアコンは、一般家庭には、まずありませんでしたので、我が家の暖房器具は、こたつが1つ、石油ストーブが1台、七輪が1つ（「何それ？」というみなさん。お家の方に聞いてください。保護者の皆様、もうしわけありませんが、子どもたちに説明してあげてください。）だけだったのです。

寒い朝は、この石油ストーブの置いてある台所にいそいで行ったものです。すると、このストーブの前には、必ずといってよいほど、私の祖母がすわっているのです。石油ストーブには、丸い形の物と、四角い形の物がありました。丸い形は、ストーブの周り、どこからでもストーブのあたたかさという恩恵（おんけい）を受けることができます。しかし、四角い形のストーブは、後ろや横は全く、あたたかくないのです。鏡のような物がついていて、ストーブの前と上だけがあたたかいのです。祖母が、ストーブの真ん前ですわっているかぎり、私と姉は、ストーブの上しかあたたれないのです。手をかざすと、さすがにあたたかいのですが、足をあたためようとすると、ストーブの天じょうに当たらないよう足を持ち上げなければいけません。ストーブの天じょうは、とても熱いからです。祖母は、ストーブの前で座り、ストーブの天じょうの上に餅（もち）をのっけて、焼いているのです。

祖母は、近所に住んでいるのに、なぜか冬の間だけ、毎朝、うちのストーブの前にやってきました。春から秋は、その姿を見たことがないのに…。「おばあちゃん、どいてよ！」とは、決して言えなかったのですが、私は、「寒い、寒い、寒い！」を連発し、祖母に何となくプレッシャーをかけていったものです。すると祖母は必ずこう言いました。

「今朝は、大霜（しも）やから冷えるのお。ほんだけんど、こんなに冷たい霜の日ほど、昼になったらあたたかくなるもんや。もう少しの辛抱（しんぼう）じゃ。もう少しの辛抱じゃ。」と、言いながら、餅をひっくり返しました。そして、焼けた餅を、私に差し出すのでした。

祖母は、あの言葉を私たち子どもに言うために、冬の間だけ私の家にやってきたのではないのか。何となくですが、そう思うのです。私に、「寒い霜の日ほど、少しがまんすれば、昼間はポカポカにあたたかくなるのだ。」ということを教えるために。いや、祖母が私に教えたかったことは、「霜の日のこと」だけではなかったのかもしれませんが。今になって思えば、人生とか生き方とか…。

朝ご飯がすむと、私は4歳年上の姉と学校に向かいました。登校班の集まる場所まで、姉と二人で歩いて行きました。

「ええこと教えてあげる。日かげは寒いから走るんやで。日なたになったら歩いたらええんで。」と、姉に言われ、その通りにしました。日かげを走ったおかげで、体はあたたまりました。朝の太陽が照らす道は、休みがてらゆっくと歩きました。登校班のみんなが待つ場所に着く頃には、寒かったこともすっかり忘れて、体はポカポカでした。そして、そんな日の昼休みは、もう上着をぬいても平気なくらい、祖母の言ったとおりの陽気になったのです。

なぜか、この季節になると、祖母と姉のあの言葉を思い出してしまいます。